

方向

第八四号 一九八八年六月一〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向 社

孤山雁信

一赤谷明海書翰集一 (二八)

原田憲雄編

★1982.7.16.原田憲雄宛。葉書。

昨十五日幻の葡萄第三巻試刷の残部落筆、今ざっと拾い読みを終えたところです。着々と御仕事が進捗するので杉田君と話していた第二巻の祝賀会が十日の菊になってしまいました。第三巻と一緒にやりましょう。款記の漢訳で御世話になった太古亭記が(書道)会賞を受けました。但し余り賞が多いのでそれがどの程度のものか判りませんが。六月二十一日から七泊八日で東北地方を廻ってきました。家内と二人で。いわき市の白水阿弥陀堂から出発、瑞巖寺、中尊寺、毛越寺、立石寺、如宝寺(郡山)等を見ました。御土産にグイ呑一個買ってきました。

★1982.8.1.同宛。手紙。墨書。

秋海棠、野牡丹が咲き出しました。今年は秋が早そうです。太古亭記の写真お笑いぐさにお目にかけます。朦朧とかすんでいるのがミソで実物を見ない方がよろしい。

ついでに幻の葡萄第三巻の誤字脱字らしいものを連絡致します。八月一日 明海 憲雄大兄へ

★1982.8.20.同宛。葉書。

十五日には態々御来駕説経賜り有難うございました。(幻の葡萄)第三巻後記九六頁七行目に小生の申出がありますので、それ以後のところを注意して見ましたが誤植らしいところはありませんでした。ただ七三三頁十四行

目の「包ましいい」の意味が判りません、うとましいいところですが……。まことに不順なお天気、よくよく御自愛下さい。篤さんへ宮崎篤三郎氏への見舞気になっています

★1982.9.3.同宛。葉書。

篤さん予想外に元気でよかったですねへ八月二十七日、赤谷明海、杉田荘作の両君と原田が宮崎篤三郎氏を長岡京市の宅に見舞った。昨二日竹内へ不成君入浴、へ西本願寺へ門徒会館へ訪ねたところ開口一番「柴野の奥さん亡くなったのを知っているかね」とのこと、勿論初耳、夜電話したら二月に逝去の由、彼の発音と小生の耳とはそれ以外の委しい事は不明です。母上は健在の模様ながら何分のお年、彼も大変でしょう、とりあえず御連絡まで。

★1982.10.21.同宛。手紙。墨書。

去九月廿一日へ嵯峨鳥居本へ平野屋でのへ森田曠平、杉田、赤谷、原田の会合のへ写真お目にかけます。フラッシュの調子が悪くボケたのもありますが辛抱して下さい。森田君から来信、杉田庵の茶室へ行くのを楽しみにしているとか。十月二十日 明海 憲雄大兄御座下

★1982.10.25.同宛。葉書。

拝復、中西の事全く記憶にありません、当時の手帳にも何も書いていません、送別会を誰が世話をしてくれたかに就いても思い出せませんが、その人が会場を設定したものでしょう、それが小生でないのは確かでしょう、森田君に問合せでは如何。彼からの来信では十一月に杉田君のところで会えるのを楽しみにしているとのことです

★1982.12.6.同宛。手紙。墨書。

一華庵での三田（原、森、杉）一谷の寄合茶、軌式ムチャクチャなれど愉快でした。その席にてお話し申し上げた中野重治の二等兵日記をお目にかけます。読後は適当に処分して下さい。十二月四日 明海 憲雄大兄

へ十二月二日午後一時半、森田曠平君の泊っているパレスサイド・ホテルに赤谷君と原田が集まり、そこから三人で一乗寺の杉田莊作君の宅にゆき茶会があった。一華庵はその茶室名。夜八時半ころ散会した。

★1983.2.8.同宛。手紙。封筒墨書。

各地の梅便りをきくもののわが家の蓄はまだまだ開きそうにありません、それでも立春がすぎたというだけで心のはずむものがあります

一日に東京へ発ち、四日に帰ってきました、胃腸の様子がすぐれないので、あそか病院で検診を受けるためでしたが委しい結果は後日のこととして、大凡のところ善変はないとの事でした

不在中に幻の葡萄第四巻（885頁―11172頁）試し刷到来しました、只今読了しましたが千美さんのひとなり、生きさまの最も鮮明な巻になったかと思えます、読みゆくほどにあの制約の多い時代を積極的に意欲的に張り切ってぶち当たっていた我々の青春が想い出され、一体今は何をしているのかと淋しさ一入なものがあります。校正せよとの事ですが殆ど見つかありません、気づいたところは次の程度です、（省略）

芝増上寺近辺の足利（八郎氏）のマンション？に泊りましたが亭主を病室の付添人のようにベッド脇に寝かせるのに恐縮して一晩でホテルへ逃げ出しました。東京は都市全体が人工の構築物で覆われているようで寒さ知らず、

京都に着いたとたんああ寒いなと思いましたが、それだけ自然が多いということでしょう。お彼岸までもう少々の辛抱・その間風邪の御用心を。二月八日午後三時

★1983.3.23.同宛。手紙。封筒墨書。内容は『方向』二三号「わたしの兵隊手帳」六に全文掲載したので省略。

★1983.4.7.同宛。手紙。内容は『幻の葡萄』第四巻の正誤表（省略）で、末尾に次の一行がある。

十日にまた会えるのを楽しみにしています

（十日、祇園の料理屋近江作に赤谷、森田、杉田、上羽正一、原田の五人が集まり夕食を共にした）

★1983.4.21.同宛。葉書。墨書。

四月十五日付貴翰に添え幻の葡萄第四巻の末尾分を落筆拝見しました。紫野来仰寺を小生のアルバムには来光寺としていますが、これは此方の誤りでしょう、第五巻の試刷を期待しています

花蘇芳ながめつくして夕べかな 憲

夜なべにたまることの多さよ 海

悠々たる間人の風雅の便りに接すれども凡愚の眼底には刷物の山に向かう丁合へちようあわせの姿しか映じ申さず候

★1983.5.24.同宛。手紙。封筒墨書。

昨日電話で申し上げたように、千美さんに直接関係ないものでも、貴兄のことに触れたものは細大もらさず日記から引き出そうとしたため、予想外に手間どってしまいました。お役に立つような作業ではなかったのですが

。ただ二十六年八月八日と二十八年一月七日の記事は直接千美さんに関係しますが、前回の時に見落したか、それとも遠慮して伏せておいたか、どちらかでしょう。

校正作業は些事に亘りすぎたようです。適当に取捨して下さい。

千美さん入院についての経済面の御苦慮思いやられます。当時小生が何の手伝いもしていないようで今更ながら悔まれます。

千美さんが今在世ならばと想像して腰折れ一つ。

しばしばを訪ひをらんはたはまた絶交中か君今在さば

五月二十四日夕 明海 憲雄大兄 (同封の資料は『幻の葡萄』第五巻後記に収めたので省略する)

★1983.8.11.同宛。葉書。

方向二四号十部 本十日到来落掌仕候 小生の駄文へ「わたしの兵隊手帳」いつまではずかしい思いをさせる事やら、程よいところで打切りと願ひあげたく、御勘考の程奉期候。今夕待望の降雨これあり、大いに歎喜いたし候処、五、六分にて終了、この分では明朝またバケツ運びと相成るべし。六月十日夜

★1983.8.4. 同宛。葉書。

先般は態々の御来訪にもかかわらず何のおもてなしもせず失礼しました、幻の葡萄四、五巻拝受、二年に亘たる労作の完結、さぞややれやれの事と存じます、招徳の原酒、早速に頂戴しました、(頼)山陽書翰に類出する諸白とは斯様のものかとおもいつつ盃を傾けた次第です、ところで先般ちよつと耳に入れました竹内(不成)君の

寺、裏山崩れで本堂全壊とのこと、東森（善城）君より連絡がありました。但し庫裡は無事、人身の事故はない
そうです、いずれそのうち参上します。

★1983.8.29.同宛。手紙。封筒墨書。

残暑殊の外きびしい毎日です、その後如何？。尻に火がついてあわてて延暦僧録諸本の対校表作成にかかってい
ますが、文意の把握なしに機械的にとは参らず、いとも難渋しています。さて次の文中にでてくる^釋禪^渴
について御教示を乞いたいと存じます。

延暦僧録上宮皇太子菩薩下（国史大系本）に

惠思心禪師の事におれ。衡山の傳説をとりあげ、

…其山門有二十里松徑。有一異人。守護此山。

若惡人入山壞（或壞）劫奪者。至松徑。異人即出

捉手牽入松林谿中。口言。汝過去無量劫中

作惡業。今且坐禪。入滅盡定。以一手投石壓
 脚上。更不得起。假令凡二十餘人。舉手彼一手
 之石不能得動。形身與凡無別。亦無栖泊處。
 若有惡人即現。無惡人不現。時共目為
 大禪渴。(一句讀返点底本のまゝ)
 如の大禪渴ですが。禪字は諸橋漢和に
 大日本仙教全書の本では大禪渴とし。同じ仙教
 全書の独出上宮白王太子聖菩薩伝には大禪渴
 としています。しおし(国史大系本)の所載と見ら
 る東大寺所蔵鎌倉期の写本には

大祥渴のようは恰ほの字が見えり。これによ
 れば祥の禱と禱から粹でも粹でも又粹も無
 理のと思われず。一他の箇所の禾偏は禾と
 事のいゝむしろ禪が取も近く或は禪
 かもしれせん。禪とすれば梵語のまじりのいと
 想像されず。それらしいものも見あらず
 禪渴にしても意味不通はと多感して
 います。

続高僧伝に何かヒントがないかと思いたいのですが手許になく、南岳衡山をとりあげた地理書か護法の仙人、童子

伝でもあればなあと思うばかりです。不明のまままで放っておくのも残念ですので貴兄の御意見をきいて何等かの判断を下したいと存じます。

御仕事の多い中恐縮ですが気分晴らしのつもりでおとりあげ願いたく、御教示の程期待しております。匆々八月二十九日 明海 憲雄大兄玉案下

★1983.10.8.同宛。手紙。

おくればせながら、拙宅の白萩が咲きはじめました。木犀の香が漂い、柿の実が色づき、次第に秋が深まってきました。つい此の間までの残暑がウソのように急に気温が下ってきました。

御家中皆々様お変わりないとのこと何よりです。

森田君入洛を迎えての会合に貴兄欠席との事でしたので小生も欠席しました。折角の楽しい集いに水をさす事もなかりうと思つて。ところで、延暦僧録逸文の校正作業 遅々として進みませんが何とか続けていきます。今聖武天皇伝を手がけているところ、中に別紙の如き詩が出てきます。玄宗皇帝の与えた相手は藤原清河、大伴胡万、吉備真備等ですので、この遣唐使が中国を辞するのが天宝十二年のことです。この詩は中国の文献に出てきませんか、尚、その詩に続いて

特差鴻臚大御將挑挽送至揚州看取。爰
別牒淮南勅處致使魏方進如法供給送遣。

の文があります。この中の蔣挑、魏方進の傳

が唐書あたりに出てきましようか、気のむいた時に調べておいて下さい。

それから詩の校正とも関係するのですが第三、第四句の意味が判りかねます、御教示願えれば幸いです。

文芸春秋十月号に松本清張氏が「思託と元開」（下）を書いていますが、下巻だけです。要旨は判ります、つまり

鑑真は中国では名僧ではなかった、一度ぐらひは航海の苦を嘗めたかもしれないが案外楽々と日本に着いている、東征伝でたいそうなことを言っているがこれは思託のデッチアゲ云々、安藤更生氏の考証にどれもこれもケチをつけるのがねらいのようです。氏の論法に就いては先に中央公論で「玄昉」を読んでいますので驚きはしません、何とも恐れ入った書きものです。但し思託を世に紹介する功はあるうか、などと苦笑しています。

毎度の事ながら又御厄介なお願いを申し出ました次第、よろしく。十月八日 明海 原田憲雄様御座下

開元皇帝御製詩送日本使 五言

日下非殊俗 天中嘉會朝

爾餘イ

朝余懷義遠

矜爾畏途遙

漲海寬秋月

歸帆駛イ 駛イ 駛イ

因敬驚彼君子

王化遠昭昭

★1983.10.25.同宛・手紙・封筒墨書。

急に寒くなってきましたがその後おかわりないこととぞんじます 先達では玄宗皇帝の御製詩につき御教示をい
ただき有難うございました、その節申しあげた増村宏氏の論文「唐の玄宗の詩「送日本使」について」関係文献
とその理解」(鹿兒島経大論集二〇巻二号、二一卷二号、二二巻一号)の写しを杉田君の御世話で入手しました、
八十数頁に亘る詳細な論考で、最初の号にはその詩を含む文献の校異検討と先人の関説、次の号には字句の異同

のえつと判りにくい表になりましたが 左の中

(2) 衿爾は衿と憐むと訓むことを示すだけで問題なく、残りは

古字本によれば「余」(3) 因聲 (4) 照々となっており

(4) 照は詩の用字としては略とが正しいが、略字が朝余、因聲と
共に用いられたことは注書に要するとして、増村氏は水戸藩の史料探訪
を精査している訣です。その結果

(1) 余と念余とするのは水戸藩関係者の傍記から発し、大日本史に

よって普及、一方水戸藩採録の日本高僧伝要文抄といち早く写し

取ったのが本朝高僧伝の作者師曾の関係者、その中から朝余が現

れる。朝余(あした)として「^ク朝余」に対する文辞として「^ク朝余」

あるが、それは古字本を知らなければ判ること。知つて今にして「余」と

どう理解するか、その用例については、知見はない。

(3) 因聲と因聲馬に誤字したのは水戸使臣の東大寺要録写しと

の時、聲耳がふしく、ことづて、まじ信、消息のまじ
(4) 照々はその時の校閲の時に昭々に改訂されらしい
と説いています。

以上の参考資料にお知らせします。尚、増村氏は蔣挑挽は醍醐
寺本東大寺四巻には明らかにも木備の文字に書写するとして蔣挑
挽と見ています。

十月二十五日 明海 原田憲雄様玉案下

★1983.10.26. 同宛。葉書。

方向第二十六号入手しました。へ「わたしの兵隊手帳」をやつと昭和二十年に差し掛かった処、まだながながと
続くでしょうから適当に間引いてケリをつけて下さい。このところ目が弱って疲れていけません、これを口実
に 校正の仕事をチョットしては遊んでいます、

この間の玄宗御製詩。あれは「完全に白々しい思託の創作」と鈴木忠治「白村江」にあるそうです。なかなか元
気な人もいるものです。十月二十六日午後三時

※前後号正誤 一頁四行 葉は↓は 七頁六行 ふんを↓文を 九頁一行 なる↓なおる 一四行 いないので
す↓いないのです。 一〇頁八行 思つて↓思つて 一一頁六行 しまった↓しまった。 一二頁二行 だろう
か↓だろうか。 一三頁四行 見える↓見える。 八行 のである↓のである。 一六頁三行 文殊にに↓文殊に
二一頁一五行 幾千億↓幾千万億 二二頁一二行 幾千万↓幾千万億

今年は葵祭の五月十五日が日曜日だったが、雨になったため順延で十六日になった。私は十年ほど以前に北大路橋で行列を見たことがあるが、それ以来見ていない。今年も見に行くつもりはなかったのに、日が延びたということ、ひよっとして人が少ないのでは、という期待から行く気になった。

急いで朝の仕事をすませると、もう十時三十分、祭の行列が発する時刻である。自転車で急げば十分余りで御所まで行けるので、なんとか行列に追い付けるはずだと思った。御所に行ってみると、行列は出てしまった後で、警察の人が、自動車の通行止めの標識や道具をゆっくりとかたづけていた。

烏丸を南へ行けば行列に追い付くだろうと、出がけに聞いたので、私はそのまま南へ走って行った。どこまで行っても祭の気配はなく、事務服を着て書類をひらひらさせた女の人や、アタッシュケースを持った外交員らしき人、とにかく烏丸は事務的なビル街だから、忙しそうな人ばかりである。祭はどこへ行ったのかなあと、間の抜けた気分での間を走り抜けながら、ほんとうに葵祭は今日なのだろうか、とあらためて考えなおしたりしていた。そこにいる人々は、祭などとは全く関係のない顔をしているではないか。御池通りを河原町まで抜けてみようかと東へ走った。

御池通りは、植え込みのある分離体で南北にわかたれた横顔の街で、自動車道路も歩道も広く、自転車の専用道路もある。しかし、どの通りでもそうであるが、自転車の道路はあたかも駐輪専用とでも思えるほど、自転車が置いてある。やっと河原町角の市役所のあたりまで来ると、なにやら祭の気配がしてきた。やれやれ祭見つけ

たぞと思ったが、様子がおかしい。祭見物らしい人が、北の方からそろそろ帰ってくるのである。

あとの祭とはこのことやな、もう行列は終わったみたいとがっかりした。そして、北の上賀茂神社へゆく行列が、烏丸を南へ下がるのはおかしいと気がついた。御所から堺町御門を出て丸太町通りを東へ行き、河原町通りを北へ上がって行ったはずである。烏丸通りを南へ行くと教えてくれた人は、時代祭と思ひ違ひしたのではないだろうか。時代祭は堺町御門を出て烏丸を南へ下がり、御池通りを東へ行つて、平安神宮に入る。

どうしようか、と考えながら、人の流れに逆らつて河原町通りを北へ、自転車を押して歩いて行つた。友達がこんなことを知つたら、あんたはひま人やなあ、優雅やなあ、とあきれて笑うだろう、その声が聞こえてくるよ。うな気がして、自分の間の抜けているのがいやになった。もう三十分早く家を出ていけば、祭の行列が御所を出るのを見て、とつくに家に帰っているのにと心の中で悔しがることしきりである。そんなうちにもとうとう下鴨神社に着いてしまった。行列は二十分くらい前に本殿に入ったようで、後でわかつたことであるが、中で儀式が行なわれているのは、入場料金を払えば見られたのである。これも知らなかつた。

下鴨神社、正式には賀茂御祖神社（かもみおやじんじや）という。お祀りしてあるのは玉依姫とそのお父さんの賀茂建角身命。玉依姫は上賀茂神社の賀茂別雷大神のお母さんだそうである。上賀茂神社は芝草が広がっていて、参道の白砂が光つて如何にも明るいのに対して、下鴨神社は糺の森に大きな木がうっそうと茂り、奥深い感じがする。その森の中に紅白の幕や、水色と白の横縞の幕がめぐらされて、華やいでいる。テントがいくつも張られた一角があるのは、リングあめや、たこ焼き、みたらしだんごなどを売っている露店で、人が集まっている。あちこちの木の根に、カメラを首に下げた男の人などが腰をおろして弁当を食べている。沼の干上がったよ

うな処の端で、女の人が数人、手づくりのお弁当を広げているところもある。大きな森だから、たくさんの方がいるのに、不思議と静かな感じがして、行列の出発を待つ間、時間の止まった祭の森のポーズである。

まだ正午を少し過ぎたばかりで、午後二時十分に上賀茂神社に向かって行列が出発するということから、それまで二時間ちかくあいだがある。仕方がないので気分を変えてこの森の雰囲気を楽しむことにした。一時から走馬の儀があるという放送があった。それを見て、行列の出る方へまわろうと思いつきながら、歩きまわってあたりの写真を撮っていた。これは後でプリントしてもらったら、「不思議やな、何を写そうとしたのか全く分からん写真がある」と笑われたのもあったけれど、シャッターを押したとたんに、レンズの前にいた人が腕を伸ばしたりして、目的のものが隠れているのである。そういうのは私にも何を写そうと思ったのか分からなかった。

走馬の儀で馬に乗る人は、どこかの大学の乗馬クラブの学生だそうで、馬の走る道のすぐ傍に座り込んでいた人は、馬のける砂を頭からかぶって、驚いて立ち上がったたりしている。乗る人がいいのか、馬がいいのか、馬上で何かの形をとりながらさっと駆け抜ける馬もあれば、重たそうにとすとす音を立てて走って行く、ちよつと滑稽な馬もある。

走馬がほとんど走り終わった頃、鳥居の傍に止めておいた自転車を押して、行列の出る方へまわって行った。入るのは正面の鳥居からだ。午後のはじめ、奥の方から西へ下鴨本通りへ出て、北の上賀茂神社へ向かう。

この辺りには、そろそろ人が集まり出していて、警察の人が道路に綱を張って整理している。行列の出発時刻が近づくと突然、どこから湧き出してきたのかと思うほど、どんとん人が集まってきて、みるみるうちに厚い人

垣ができ、その人垣の後のすき間を通過して、果てしないほどの見物が、そろそろと上賀茂の方へ向かって歩いて行くのである。それはもうあつけにとられるほどの大群で、春先によく聞く蜂の移動というものよりまた大変なのではないかとびっくりしてしまった。気がつくといつの間にか人垣の後へ押し出されて、行列の通る道などどこにも見えない。声にこそ出して争わないが、すきがあれば割り込もう、押し返そうとばかりの場所争いである。よほどの覚悟がないと、行列をそっくり見られるような位置は保てない。速くから観光バスで来て、三時にはバスに集合だからなどといっている人達は、見ようとする意気込みが違う。私の横にいた人は、サラリーマン風の男の人達で、見物の人の品さだめをしながら、のんびり立っている。年上の人は、「おれ、立ったまま寝てるさかい、行列が出て来たら起こしてくれ」などと言っている。若い人はおかまいなしにしゃべり続けるので、「おまえちよっとしゃべりすぎる、これでも嘘んで黙っとれ」とガムの箱を渡す。その間も本当にさまざまな服装で、親子連れ、若い夫婦、老夫婦、どういふ関係だか分からない人達など、見ている飽きないほどの人の列が北へ向かって動いて行くのである。

やっと祭の行列の先導をする乗尻という人が、馬で数人出て来た。しばらくして検非違使。馬上の人は見えるが、歩いている人は見えない。馬のおいがし、ひづめの音、馬の鼻息が聞こえる。ときどき人のすき間からのぞいてみる。牛車が出て来た。屋根から藤の花のかざりを一杯に垂らし、ギシギシ音をたてて、一瞬、見物がとよめく、美しい童が二人赤い水干姿で牛を引いている。今年の童は、小学校二年生の双子の男の子だそうである。風流傘が花かざりも美しく、ゆきゆきと出てくる。命婦や女孺が出てくると、サラリーマン風の人は「おおっ」

と声を上げた。それから「美しい人もあるし、それはそれなりにという人もある」と言った。私も背伸びしたり、すき間からのぞいたりしたが、なるほどその風俗がよく似合う人とそうでない人はあっても、それぞれに美しくった。

男の人達も、光源氏のように、匂いだつほどの人があるかどうか分からなかったが、冠や袍のめずらしい装束を着けているから、みんな特別にかたちよく見える。これこそ幻を見ているのに違いない。ただ、孫だ親類だ友人だと手を振っている人には、もう少し現実的なものなのだろうか。

やっと斎王代の腰輿が出て来た。見物からは、待っていた本命が現れたという雰囲気盛り上がる。カメラを頭の上へ持ち上げて写真撮っている人もある。「なんやいかげんなかつぎ方しと思つたら、車がついてんのやな、あの輿は」と言っている人がある。十二単衣を着た美しい斎王代が、にこにこしながら、下にいる男の人としゃべっている。昔の親王さんだつたら輿をかつぐ人としゃべったりはしなかっただろう。もちろん行列が進み出したら、斎王代も威儀を正して前を見るのだが、今はまだ周囲の人に気を遣っているのである。斎王代になつて行列に出るには、百万近いお金が要ることだから、祭をするのも大変だと思う。写真を撮らしてもらおうと思つて、人垣の間からカメラをのぞいていたら、前にいた男の人がひよとしゃがんでくれた。シャッターを切ったら、その人が振り向いてにこつと笑つた。アメリカ人らしい色の黒い人だった。何と言おうかと思つたが、私も笑つてちよつと頭を下げた。これもあとでプリントしたら、思つたよりずっと遠くに斎王代が写つていて、顔などはよくわからないものだった。

見物の大群が動き出さないうちに帰ろうと思って、家のすきまに入れておいた自転車を引き出して、葵橋を渡り、御所へは行って、じやりの上を走った。祭のあとの御所は静かで人影もない。蛤御門から出ると少し南寄り、下長者町通りがまっすぐ西へ通っている。最後の力を振りしほってスピードアップして家までたどりついた。祭をさがして走りまわったので疲れてしまって、もうお祭はいやと思ったのだけれど、日が経つとまたなつかしくなってきた。

この賀茂祭は千四百年の歴史があり、欽明天皇の二十二年に風水害や疫病が蔓延したので、山背の賀茂の大神の御嶽を鎮めるために、祭をしたのがはじまりだそうである。その後、嵯峨天皇が皇女有智子内親王を齋院として、奉仕されるよう定められてから、齋院は三十五代、約四百年続いたというが、現在のように祭礼の日に齋王代を立てて女人列が参加するようになったのは昭和三十一年からなので三十年くらいにしかないわけである。上賀茂神社の御祭神が雷さまで、そのお母さんが魂の憑る姫だというと、大宇宙と人間との関り、畏れ、そして交歓など、すべてを包み込んだものが祭なのだということがうなづける。科学が進歩しても人間の意のままにならないのが自然だから、祭をしてひれ伏すか、太鼓をたたいて踊ってしまうのが、最良の手段、そのおかげで人間は生きてきたときえ思えてくる。

今年の祭見物は失敗したけれど、祭というものの大きな器を見たような気がした。来年はもっと早く行って、祭の行列から神社での儀式まで、しっかり見せてもらいたいと思っっている。「あんだ、ほんまにひま人やなあ」と笑う声がまた聞こえてきた。

ジナの子ら

一法華經巡礼 161

1988.5.31.

原田憲雄

前回は弥勒ボサツが文殊ボサツに問い掛ける詩の途中までだった。今回はその続きである。

1.32. わたしは見る、ボサツたちが、ピクや出家者さながらに、林に住み、

人気ない荒野に入り、経典を解説し、讀誦し、たのしむさまを。(22)

わたしは見る、ボサツたちが、堅く決意し、山中の洞穴に入り、

仏の智慧を観察し、熟考し、了解するのを。(23)

愛欲を残らず捨て、自我を圧え、行動を清らかにし、

五神通をそなえ、荒野にとどまる、スガタの子らを。(24)

あるひとびとは、足をくみ安坐して、導師に向かい、合掌し、

歡喜して、一千の詩で、ジナの王者を讚嘆する。(25)

あるひとびとは、記憶ゆたかに、熟練し、微細な行為を見極めて、

兩足の尊いかたに、法を問い、耳を傾け、その法の念持者となる。(26)

自我を圧えた、ジナの王者の子らの姿を、わたしは見る、あちらこちらで、

幾百万、幾千万のひとびとに、譬喩、因縁で法を説くのを。(27)

よろこび勇んで、法を開示し、ボサツたちを教誡し、

軍隊と戦車をもつ悪魔たちを征服し、法の太鼓を打ち鳴らす(28)

わたしは見る、スガタの教えに従って、人、天、ヤクシャ、ラークシャサに尊敬されても、

驚いて、スガタの子らは高ぶらず、立ち居しずかに懐むのを。(29)

またあるひとは、密林に住まいして、体から光りを放ち、

地獄より、衆生たちを救いだし、覺りにみちびく(30)

英雄的なジナの子らは、怠りを残らず捨て、

逍遙し、森に入り、無上道への旅立ちに精進する。(31)

摩尼珠や宝玉そのままに、完全に清浄な戒律を、守り続けるひともいて、

修行を成就し、戒律たもち、無上道へと進むのだ。(32)

忍辱の力によって、ジナの子らは、増上慢のピクたちの罵りや、

はずかしめ、脅かしを、耐えしのび、無上道へと進むのだ(32)

わたしは見る、またあるボサツは、楽しい遊戯をすべて捨て、

愚かな友人たちから離れ、好んで聖者と交わるのを(33)

放逸の心をのぞき、いっしんに森林の洞穴で、

瞑想すること千万億年、無上道へと進むのだ(34)

またあるひとは、弟子の一群を伴ったジナに対して、密進する、

食糧や食事、飲物、薬など、数かぎりなく。(30)

kāṃścic ca paśyāmy ahu bodhisattvān bhikṣu samānāḥ pavane vasanti /
śunyan̄y arāḍyāni niśevamānān uddesa-svādhyāya-ratāṃś ca kāṃścit #22#
kāṃścic ca paśyāmy ahu bodhisattvān gīrikandaresu praviśanti dhīrāḥ /
vibhāvayanto imu buddhajñānaṃ paricintayanto hy upalaksayanti #23#
utstrīya kāṃāṃś ca aśesato'nye paribhāvitātāna viśuddha-gocarāḥ /
abhiḥjñā pañceha ca sparśayitvā vasanty arāḍye sugatasya putrāḥ #24#
pādaiḥ samaiḥ sthity iha keci dhīrāḥ kṛtāñjali asimukha nāyakānāṃ /
abhishtavantīha harsaṃ janitvā gāthā-sahasrehi jinendrarājan #25#
smṛtimanta dāntās ca viśāradās ca sūksmāṃ carin keci prajānamānāḥ /
prechanti dharmaṃ dvipodottamānāṃ śrutvā ca te dharmadharā bhavanti #26#
paribhāvitātāna jinendraputrān kāṃścic ca paśyāmy ahu tatra tatra /
dharmam vadanto bahu-prāga-koṭināṃ dr̥ṣṭānta-hetū-nayutair anekaiḥ #27#
pramodya-jātaḥ pravadanti dharmam samādapento bahu-bodhisattvān /
nihatya mārāṃ sabalaṃ savāhanaṃ parāhananti imu dharmā-ḍundubhiḥ #28#
paśyāmi kāṃścit sugatasya śasane saṃpūjitān nara-maru-yakṣa-rākṣasaiḥ /

suvismayantān sugatasya putrān anunnatān śānta·praśānta·cārin //29//
 vanasandā niśrāya tathānya rūpā avabhāsu kāyātu pramuñcamānāḥ /
 abhyuddharanto marakesu satvāṃs tāṃś caiva bodhāya samādāpenti //30//
 vīrye sthitāḥ keci jinasya putrā midhaḥ jahitvā ca aśeṣato'nye /
 cankrāmya·yuktāḥ pavane vasanti vīryeṇa te prasthita agrabodhin //31//
 ye cātra faksanti sadā viśuddhaḥ śīlaḥ akhaṇḍaḥ maḍirātna·sādrśaḥ /
 paripūrṇa·cārī ca bhavanti tatra śīlena te prasthita agrabodhin //32//
 ksānti·balā keci jinasya putrā adhimāna·prāptāna ksāmanti bhikṣuḡāḥ /
 ākrośa·paribhāsa tathaiiva tarjanāḥ ksāntya hi te prasthita agrabodhin //33//
 kaṃścic ca paśyāmy ahu bodhisattvān kriḍāratiḥ sarva vivarjayitvā /
 bhāṣān sahāyān parivarjayitvā āryeṣu saṃsargaṅgatān samāhitān //34//
 viksepacittāḥ ca vivarjayatān ekāgracittān vanakandareṣu /
 dhyaṃyanta varṣāna sahasra·koṭya dhyaṇeṇa te prasthita agrabodhin //35//
 dadanti dānāni tathaiiva kecit saśiṣya·saṃgheṣu jineṣu saṃmukhaḥ /
 khādyaḥ ca bhojyaḥ ca tathānnapānaḥ gilānahaisajya·bahū analpakam //36//

「シナの子」などと呼ばれるボサツの姿が描かれ、「記憶」のような言葉が見出されるが、その解説は次号に。